

平成 26 年度北海道教育大学特別支援教育プロジェクト

地域特性に応じた特別な教育的ニーズに関する

情報システムの構築

—地域支援と情報提供—

報 告

北海道教育大学

特別支援教育プロジェクト

平成 26 年 3 月

目 次

プロジェクト・メンバー

はじめに

I. 本年度の概要

II. 事業成果の概要

1. ツールの開発・人材育成システム・教材の開発

- (1) ツール開発：携帯型端末を利用した学習指導の方法の検討
- (2) 人材育成

2. 地域支援に関する実践

- (1) インクルーシブ子育て支援「キンダーぷらっつ」
- (2) ドンマイの会
- (3) アダプテッド・スポーツクラブの実施

3. 調査研究と情報収集

- (1) へき地教育研究支援部門の研究課題
- (2) 地域の特別支援学校、附属学校との共同研究
- (3) 道外視察
- (4) 福祉関係機関との情報交流

4. 情報提供

- (1) 講習会・フォーラム
- (2) ほくとくネット

III. 実施した事業

IV. 成果の公表

1. 学術論文等
2. 著書
3. シンポジウム・学会発表等

プロジェクト・メンバー（平成 26 年度）

札幌校

青山 眞二・札幌校・教授
池田 千紗：札幌校・特任講師
齊藤 真善・札幌校・准教授
千賀 愛・札幌校・准教授
三浦 哲・札幌校・教授
安井 友康・札幌校・教授

教職大学院

小野寺 基史・教職大学院・准教授

旭川校

安達 潤・旭川校・教授
蔦森 英史・旭川校・講師
萩原 拓・旭川校・教授

釧路校

小淵 隆司・釧路校・准教授
戸田 竜也・釧路校・講師
二宮 信一・釧路校・准教授

函館校

五十嵐 靖夫・函館校・教授
北村 博幸・函館校・准教授
細谷 一博・函館校・准教授

岩見沢校

大山 祐太・岩見沢校・講師
小北 麻記子・岩見沢校・准教授

附属函館特別支援学校（主な担当者）

平田 新次郎・附属函館特別支援学校
厚谷 摩紀・附属函館特別支援学校
白府 士孝・附属函館特別支援学校

附属札幌小中学校ふじのめ学級（主な担当者）

金澤 恵美・附属札幌小中学校ふじのめ学級
田外 真也・附属札幌小中学校ふじのめ学級
松田 岳大・附属札幌小中学校ふじのめ学級

はじめに

近年の大学改革実行プランでは「激しく変化する社会における大学の機能の再構築」として学生の「主体的な学び」を拡大する教育方法の革新（参加型授業、フィールドワーク等）、「地域（社会・産業・行政）と大学との組織的な連携強化」「大学の生涯学習機能の強化」などが提起されている。さらに今後予定されているインクルーシブな教育システムの構築に向けて、特別な教育的ニーズを持つ子どもへの支援方法に関する情報収集と支援方法の実践的な学びが求められている。

今後、日本においてもインクルーシブ教育の実施に向け教育環境の構築に向け、特別支援教育に携わる教員のみならず、通常学級における特別な教育的ニーズのある子どもやその保護者に対し、地域の特性に応じた教育的支援ができるような指導力育成のためのカリキュラム作りが求められている。さらに新しい学力観のもと基礎的な知識・技能の習得を基盤とする思考力・判断力・表現力の形成が期待されており、従来の学習困難児や特別なニーズのある子どもの支援に対しする対応が広く求められている。

本プロジェクトでは、北海道の広域に展開する地域に合わせ、特別な教育的ニーズを有する子どもの教育・支援にかかわる質の高い情報を提供するために、これまで構築してきた情報サイトを媒介に教材と支援方法を提供するための発達支援の方法（個別の教育計画作成の支援）に関する情報コンテンツ作成および教材作成と地域ニーズの検討を進める。さらにその情報・教材を活用して教育現場のサポートにつなげることができるような、発達支援・地域支援方法の検討を行い地域への情報普及を図ることを目的とする。

I. 本年度の事業概要

本年度も北海道の広域に展開する地域に合わせ、特別な教育的ニーズを有する子どもの教育・支援にかかわる質の高い情報を提供するために、これまで構築してきた情報サイト「ほくとくネット」を媒介に、特別支援教育に関わる教材と支援方法に関する情報を提供するための情報コンテンツの作成とともに発達障害のある子どもたちの教育に使用できる絵カードなどのデジタル教材の作成を進めた。

地域特性が大きい特別なニーズ教育の内容に対して、5つのキャンパスの関係教員が協力して地域のニーズに合わせた研修などを実施することにより、教育機関、（上川教育局、空知教育局、北海道特別支援教育センター）、福祉機関（障害者支援施設/福祉事業所）との連携を進めた。

へき地・小規模学校が多数ある北海道では、広大な地域における特性に応じた専門機関の支援・サポートを利用しつつ、特別な教育的支援を必要とする子どもへの対応をすることができる人材を育成する必要がある。地域支援の方法については、本特別支援教育プロジェクトが開催する研修会の実施（発達アセスメント、発達支援方法などの各種研修会の実施）、協力する研修会や研究会、学会（主催、共催、後援など）における情報配信、それらの内容に関する「ほくとくネット」を通じた情報発信を継続的に行った。

国連の「障害者権利条約」の批准とともに、今後特別な教育的ニーズを持つ子どもに対する包括的な支援に関する情報ニーズは、ますます高まるものと考えられる。平成22年度からの5年間の取り組みは、これらのニーズを先取りしたものと言え、その成果を活かしながら、インクルーシブ教育にも対応できる新たな人材を育成するための情報提供のシステムの構築を進めている。

システム構築の背景には、障害の重度化や発達障害などとともに、インクルーシブな教育環境に対応した支援とともに、情報共有の難しさから学校が地域の教育・福祉資源と実際の連携を取れないという問題があるため、適切な地域支援体制の更なる発展をはかることが求められているという地域の現状がある。

本年度も、遠隔地域、海外を含めた情報ニーズの検討と発達支援のためのツール・教材開発国内外の学会や講演会などを通じて広く報告が行われた。特に取り組み内容に関しては、複数の国際学会や国内の学会、北海道の研究会などにおいて報告されている。本学の取り組み動向については、今後も継続的な情報・教材の配信が期待されている。本学の中期計画に基づき進められてきたプロジェクトにおいて構築されてきた特別支援に関する情報提供のシステムを、発展させるとともに、これらを利用した小・中・高等学校と特別支援学校の教員を育成するための効果的な支援情報提供のシステムを模索するための資料を収集する。

特に遠隔地を含めた道内の特別支援教育関係者や通常学校において特別なニーズのある子どもの教育に携わる教員、福祉等の関係機関への支援ノウハウを含めた情報の方法は、今後、国内をはじめアジア各国に対する地域支援モデルの提示につながるのではないかと考えられる。

Ⅱ. 事業成果の概要

1. ツールの開発・人材育成・教材の開発

(1) ツール開発：携帯型端末を利用した学習指導の方法の検討

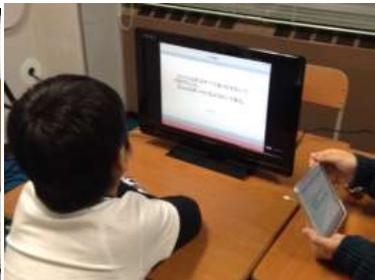
函館校では『発達支援方法及び検討』について検討を進めている。これまでの「携帯型端末(I Pad mini)」を使用した実践では、教材の提示等、狭義の意味で視覚的なツールとして用いてきたが、昨年度より携帯型端末を活用した支援方法の検討について実践を通して検証を進めている。実際の臨床場面で、子どもの教育的ニーズに合わせた活用やよりわかりやすい視覚的なツールとして効果的に活用できたことから、本年度も携帯型端末の活用について幅広く検証がすすめられた。

携帯型端末を利用した学習指導の方法について、実際の臨床場面での活用を試み、地域への還元の方法について検討した。その結果、大学での指導事例をもとに地域の小学校へ方法論を提供し、地域の学校(特別支援学級)で携帯型端末を用いた授業実践を実施。また、日常の臨床授業の中でも積極的に活用し、学士論文へとつながっている。さらには、現職教員を対象とした研修会においても、大学での指導事例を報告した。

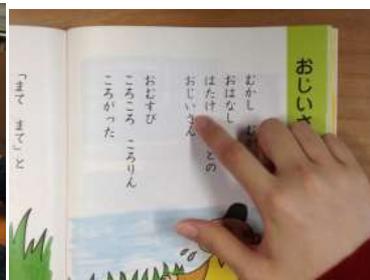
これまで、大学内での指導方法を地位の学校に提供する場面が少なかったが、携帯型端末を利用した指導事例や指導方法を地域の特別支援学級に還元できた事は大きい。さらに、日常の臨床指導の中でも、これまで学習(特に書字や音読など)に躓きを示し学習意欲が低下していた児童に対しても効果的であり、学習に取り組む姿勢を構築することができた。



<書字学習の事例>



<音読学習の事例>



<教科書を題材とした音読学習教材>

これらの成果については、現職教員を対象とした研修会「幼児児童生徒の長所を活用した授業づくりと指導(北海道特別支援教育センター報告http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=29)(2015/1/16更新)」にて大学での臨床成果を紹介するとともに、実際の教材づくりについて演習を通して紹介した。

さらに指導事例を提供した地域の学校(特別支援学級)で携帯型端末を用いた授業実践を実施して、一定の学習効果をあげているとの報告を得ている。



<携帯型端末を用いた音読>



<携帯型端末とモニターを用いた授業>

これまで、大学内での指導方法を地域の学校に提供する場面が少なかったが、携帯型端末を利用した指導事例や指導方法を地域の特別支援学級に還元し、実際の教育場で展開できた事は大きい。また、日頃の大学での臨床授業の中で活用し、卒業論文を執筆できた事は大きな成果である。特に音読の苦手な児童への指導や日常生活スキルの獲得にむけた動画を用いた指導では、一定の成果を挙げると共に実際の教育現場でも活用できる臨床力を身につけることができた。

(2)人材育成

1)教育実習の質的向上と研修コンテンツ開発

平成26年度は、札幌附属小学校・中学校ふじのめ学級と大学の連携によって、教育実習の質的向上と現職・学生を対象とする研修コンテンツ開発に取り組んだ。

本年度8－9月には、特別支援教育専攻2年次全員がふじのめ学級において3週間の実習を行い、研究授業の準備段階で実習生自身の授業を撮影し、映像による振り返りを行った。これにより、自分では気づかない声の大きさやスピード、授業時に見逃した児童生徒の反応や発話を確認することができ、有意義であった。また事後指導の一環としてふじのめ学級が主催する研究大会に参加するとともに、会場設営や授業の撮影などを行った。

11月21日には、ふじのめ学級において開級50周年記念研究大会として、全道教育研究大会を開催し、研究主題「自分らしさを志向し続ける子どもを目指して～豊かな“ことば”がつながる授業づくり」をもとに授業公開と研究協議を行った。参加者は全道・札幌市内から特別学級教員・通常学級教員や教育委員会その他の教育関係者を含めて211人が参加し盛況となった。

研究大会の様子は、日刊紙の北海道通信の紙面において、12月3日付の「道教育大附属札幌小中・ふじのめ学級の研究概要【上】豊かなかわりあいを通して」および、12月4日付には「道教育大附属札幌小中・ふじのめ学級の研究概要【下】“考えや思い”発揮できる支援」として2日間にわたって大きく報道され、注目されることとなった。

教育実習の質的向上という側面では、実習校のふじのめ学級との共同研究によって、実習の意図や目的を共有し、より効果的な学生指導のための情報を共有することができた。

ふじのめ学級が取り組んだ研究主題「自分らしさを志向し続ける子どもを目指して～豊かな“ことば”がつながる授業づくり」の実践研究では、主に国語や数学（図形）において「豊かな“ことば”」で児童生徒が自分の「考えや思い」をもって「ひと・もの・こと」と豊かに関わりあいながら活動する子どもたちの姿を引き出すことができた。しかし、「実際的な経験が不足しがち」と言われる知的障がいの子どもたちにとって大切な「実際

的・具体的内容」の指導についても、「なってみる」「引き付けて学ぶ」という考えで検討しなければならないことも分かってきた。引き続き来年度の研究大会に向けて、継続的な教材・授業研究を推進していく。

2)FD を通した人材育成の検討

札幌校では平成 22 年度から自主的なFD企画の一環として「対応が難しい学生・院生に関する理解と支援」に関する事業を毎年継続的に行ってきた。昨年までの自主的FD活動のアンケート結果から、年間1回ではなく年度内に複数回実施してほしいとの意見が多くあったため、今年度は参加者が各自で昼食を持参して行うランチミーティング方式で複数回実施することとした。

平成26年度は、延べ17名の教員が参加し、同じキャンパス内で共通する実習や進路の指導、研究室運営、講義・試験における対応が難しい学生・院生について意見を交流し、それぞれの経験を話し合う機会となった。教員が一人で対応するのに苦慮する学生・院生は、どのような集団であっても少なからず存在する。大学教員として、事態が深刻化する前の初期段階で対応を工夫し、その経験や対応方法について話し合うことによって、様々な個性・特性をもつ学生・院生への理解が深まることが期待できる。

学内の講義・会議や出張が多い日程のなかで、可能な限り負担のない時間帯として、平成25年度からランチミーティング方式を導入した。もっと時間がほしいという声もあるが、来年度は教員以外の大学職員にも呼びかけて参加者を増やしたい。

2. 地域支援に関する実践

(1) インクルーシブ子育て支援「キンダーぷらっつ」

インクルーシブ子育て支援「キンダーぷらっつ」を札幌校臨床スペース小ホール・遊戯室にて実施、平成26年度は毎月1回、計11回実施し、地域の親子、延べ約200名が参加した。札幌校に設置された特別支援教育臨床スペース（小ホール・遊戯室）を活用し教員、学生が休日の遊びの支援を実施した。



平成 26 年度の実施実績

	日時	時間	活動内容
1	4月19日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、
2	5月17日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、
3	6月21日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、
4	7月19日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、ロープ
5	8月23日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、ロープ
6	9月20日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、ロープ
7	11月15日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、ロープ
8	12月23日 火曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、ロープ

9	1月24日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、ロープ
10	2月21日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、クライミング
11	3月21日 土曜日	10:00-14:00	トランポリン、エアポリン、光と音楽

(2) ドンマイの会

ドンマイの会(当事者の会)「体操教室」を、札幌キャンパス、小ホール(体育館)で 回実施、スタッフ、学生の参加により実際の地域の教育・支援ニーズに対する支援を行うとともに支援における実践力の向上や大学機能の活用に関する基礎的な情報の収集を行うことができた。

実施日程

<小学部>	日程
第1回	6月22日(日)
第2回	7月27日(日)
第3回	9月7日(日)
<中高生部>	
第1回	6月28日(土)
<青年部サロン>	
第1回	7月5日(土)
第2回	9月6日(土)
第3回	11月8日(土)
第4回	1月10日(土)
第5回	2月7日(土)

(3) アダプテッド・スポーツクラブの実施

1) 活動概要

事業名：アダプテッド・スポーツクラブ

目的：万人に対するスポーツ機会の提供と、それによるスポーツ文化の振興を目指す

概要：主に北海道教育大学岩見沢校の体育施設を活用し、月1～2回程度スポーツ活動を実施する。 市内社会福祉施設と連携し、岩見沢校学生の協力を得ながら、参加者のニーズに応じて活動する。

対象：希望者(障害の種別、有無を問わない)

活動実績：

活動日	時間	人数	主な内容
6月18日(水)	13:00~14:00	7名	スポンジテニス、バドミントン
6月19日(木)	10:30~12:00	24名	スポンジテニス、バドミントン、卓球、エアロバイク等
7月10日(木)	10:30~12:00	23名	スポンジテニス、バスケットボール、卓球、ボール運動等
7月12日(土)	—	8名	ウィルチェアラグビー大会観戦、体験会参加

8月28日(木)	10:30~12:00	24名	バスケットボール、ボッチャ、卓球、ボール運動等
9月17日(水)	13:00~14:00	6名	スポンジテニス
9月18日(木)	10:30~12:00	23名	スクーターボード、フライングディスク、ボールプール等

2)活動内容

これまでスポーツを積極的に実施してきたという者はほとんどおらず、動くことに対する抵抗感・疲労感が強い者も少なくないため、基本的に運動を楽しむことを念頭におき、「楽しんでいたら意図せずいい運動になっていた」という状態を目指している。

参加者は、障害の種別・有無を問わないとしている。現時点では知的障害の者が多く、他に視覚障害、自閉症、難聴、高次脳機能障害、車椅子ユーザーなど、参加者の心身の状態は様々である。そのため、同一のプログラムを提供するよりは、様々な競技や用具に触れることができる環境設定を心掛け、各人が希望に応じて活動できるようにしている。大勢で交代しながら卓球をする場合もあれば、それぞれがバスケットゴールにシュートしたり、エアロバイクをこいだり、ボールプールに入ったりと、自由に活動する場合もある。

また、特に知的障害者は接触する相手が家族や施設職員、学校の教員に限られる場合が多いので、本学学生も「ボランティア」ではなく「参加者」として自由に参加できるようにし、交流機会確保も想定している。ただ、授業との兼ね合いもあり、現時点では多くて5~6人の参加となっている。

今後、活動を継続してゆくなかで、参加者の希望に応じて、目的を焦点化した（例えば肥満解消、運動習慣の確立など）年間を通したスポーツプログラムの提供を実施する。以下活動の様子（一部）を紹介する。

【ボールプール】

主に下肢機能に障害のある参加者向けに実施。フロアではほとんど動かずにいるが、上下に揺れる感覚を楽しみながら、体を揺らす・起こす、姿勢維持をするなどの運動をすることができる。また彼らは、フロアではボール遊びをすることがなく、これは、自身でボールを拾いに行くことが難しいため、無意識的に避けている、またはそもそも楽しそうに思えないためと考えられた。囲いがある中ではボールを掴んで遊んだり投げたりする姿が多く見られ、また、囲いがあることで転倒時の心配もない。



【スポンジテニス】

ボールが当たっても痛くなく、ボールコントロールも比較的容易であるため、初心者でも取り組みやすい。ラリーが続くことは多くないが、あえて用意するボールの個数を少なくすることで、ボールを拾いに行く頻度を増やし、運動量を確保している。



【スクーターボード】

スピードの出る感覚自体が楽しく、少しの力で容易に移動できるため特に日頃機敏な動きを得意としない者に好まれてい



る。意図的に着座面積の小さなものを使うことで、床に擦ってスピードを落とさないよう足を上げたり、まっすぐ進むよう姿勢を維持したりと、自然と体の各部に適度な負荷をかけるようにしている。スピード感、不安定感に抵抗がある者もあり、好みはわかる。

【エアロバイク】

バランスを取る必要がないので、自立に補装具が必要な者もペダルをこぐなど、好評であった。どこまでスピードをだせるか自身の記録に挑戦する者や、「サイクリング」といって自転車の気分を味わいながら運動する者もあり、器具の「非日常感（普段乗れない自転車気分）」が好評を得たのではないかと思われる。ある程度の運動負荷が見込めるので、今後うまく動機づけることによって、楽しみながらもいい運動をしてもらう可能性がうかがえた。



(4)地域支援に関する実践

中標津町、標津町における障害児のきょうだいキャンプを地域の保護者、関係機関と共同で組んでいる。現在までに3回実施した。この取り組みは、釧路校の特別支援教育実習教育活動として位置づけ、毎年20名～30名の学生も参加している。

3. 調査研究と情報収集

(1)へき地教育研究支援部門の研究課題

「へき地・小規模校を抱える自治体における就学前から学齢期の育児・発達支援と地域教育機関の支援及び連携のあり方に関する縦断的研究-支援機関と地域教育機関との協働による支援事例の検討を中心に-」のフィールド先である中標津町「特別支援教育地域連携共同研究会」へ定期的に参加している（今年度から3カ年計画）。これまでに3回研究会を実施した。研究会は「地域教育行政機関、地域学校教育機関(町立学校、道立特別支援学校高等部)、地域発達支援機関(児童デイサービスセンター、放課後デイサービス)、地域子育て支援機関(子育て支援室)から参加している。現在13名だが、今後保護者へのインタビュー調査など支援事例を検討する際、インフォーマントとして保健師、保育士など必要な方にも加わっていただき、地域の持続可能な研究会への発展を展望したい。

(2)地域の特別支援学校、附属学校との共同研究

1)肢体不自由養護学校との共同研究

「障害のある児童生徒の心理アセスメントにおける信頼性と妥当性の検討」(今年度から3カ年計画)。肢体不自由児や障害の重い児童の心理・発達アセスメントの方法、内容についてその妥当性と信頼性を教育実践と結びつけて検討している。授業中の児童の行動観察と新版K式発達検査を活用した発達診断の結果とをつなげる発達のカンファレンスを行っている。視覚的な映像の蓄積、知能・発達検査の活用について、現職教員と共同で研究をすすめている。期待される成果として、1)発達診断の結果を具体的な児童生徒の行動や活動と照らし合わせ、発達の視点から児童理解することが可能となる、2)教員の児童生徒の生活における発達の視点の獲得。児童生徒の発達の視点からの理解の深化、3)医療機関や発達支援

センターでの心理発達検査の結果(心理発達診断)を児童生徒の生活の中にあらわれている姿とつなげ、教育目標や課題を明確にすることができる、4)既定の発達検査項目だけではアセスメントが難しい障害に対し、検査項目の条件を変える、など工夫することで、新しい発達診断法が開発できる可能性が期待され、このことは、他の特別支援学校にとっても有意義であると考えられる。

2) 附属学校との共同研究

本学教員と附属特別支援学校ならびに附属小中学校（ふじのめ学級）における共同的研究を進めた。特に特別支援学級在籍児童の授業場面における「人間関係の形成」について、体育授業：体操教材におけるトランポリン運動の活用効果に関する実証的研究などの取り組み行われ、継続的な研究に結びついている。

(3) 道外視察

1) 附属ふじのめ学級では、平成 27 年 1 月～3 月に教員各 1 名による岐阜大学教育学部附属小学校および筑波大学附属大塚特別支援学校の研究協議会への参加と現地調査を実施した。ふじのめ学級の教員は、毎年 200 人規模の研修大会において授業を計画・公開し、研究会を主催する立場にあり、他大学の附属校で開催される授業公開を伴う研究協議会に参加し、現地の情報を収集することは、今後も継続して実践的研究を推進するために必要不可欠の機会となっている。

2) 附属函館特別支援学校では、北海道内の特別支援学校の研修会や他附属の研究会に参加し、様々な情報の収集を行うことができた。前年度同様、研究テーマや研究の進め方、それぞれの学校がある地域の実態等を把握することができ、大学と共催で進めている「現職教員のための臨床研修会」や、これから進めようとしている研究や取り組みについても多くの成果を得ることができた。成果の発表として、今回得られた成果を参考に、本校の各種取り組みを実践し、本校の公開研を始めとし、学術論文や学会発表等で、情報の発信や成果の発表等を行っていききたい。

(4) 福祉関係機関との情報交流

1) 情報交換会

平成27年2月8日 札幌駅サテライトキャンパス

福祉関係機関との連携を図るため、福祉事業所関係者と本学教員、学生との情報交流会を実施した。本学卒業生で福祉系の事業所・機関で働くメンバーを中心に、現役学生との情報交流会を実施した。当日は福祉事業所の関係者8名、学生8名、特別支援学校現職教員1名と本学教員により、福祉現場の現状や課題、学生の取り組みなどに関して情報交流が行われた。



2) 障害者支援施設

北海道内の知的障害者支援施設（太陽の園）、生活支援センター（伊達市）、支援事業所

(伊達コスモス21)などの事業所との情報交流福祉機関との連携の在り方などを理解するため、学生の研修を実施。平成27年2月18-19日

4. 情報提供

(1)講習会・フォーラム

各地域において特別な教育的ニーズに対するアセスメントや支援方法に関する講習会やフォーラムを実施した。

1)旭川地域のプロジェクトでは、今年も平成27年1月14日(水)、旭川市大雪クリスタルホールと旭川市神楽公民館木造館を会場に、「平成26年度子ども発達支援合同研修会」を開催した。270名を超える参加者に、研修会への関心の高さがうかがえた。「これからの共生社会における子ども発達支援について」と題して、旭川校教授安達潤による講演を行った。障がい者権利条約の批准にはじまり、それに伴う各条項の内容について解説した。これからの障がい児支援における重要なキーワードについても触れ、ライフステージに応じた切れ目のない支援について具体的な話題の提供を行った。

(2)ほくとくネット

情報サイト「ほくとくネット」のアクセス数は、平成27年度3月に5万9千件を超えるなど、特別支援教育に関する教材や情報提供サイトとして定着してきている。関係学会を始め、フォーラムや研修会、学生の実践力向上に結びつくプロジェクト主催の地域支援活動などに関する情報提供を行った。

Ⅲ. 実施事業等（研修会等）

日本K-ABCアセスメント学会第17回北海道大会

2014年8月23日（土）～24日（日）

北海道教育大学札幌校

平成26年度全道教育研究大会 ふじのめ学級開級50周年記念研究大会

北海道教育大学附属札幌小・中学校 特別支援学級（ふじのめ学級）

平成26年11月21日

研究主題「自分らしさを志向し続ける子どもを目指して～豊かな“ことば”がつながる授業づくり」

授業公開と研究協議

特別支援教育における情報教育研修会(プロジェクト共催事業)

第14回北海道の特別支援教育における情報教育研修会、

平成27年1月9日(金) 9時30分～17時、

道民活動センタービル（かでの2・7）

平成26年度 子ども発達支援合同研修会の開催

テーマ「連携を通じた子どもの育ちを考える」～地域で顔の見える関係を築くには

平成27年1月14日（水） 10:00-16:50、

旭川市大雪クリスタルホール

平成26年度専門家研修 公開講座及び第4回教育アセスメント研修会

「インクルーシブ教育を目指した授業づくりに生かすアセスメント」

～子どもの強みや良いところを生かすために～

平成27年1月14日（水） 13:00～15:10

会場・主催 北海道教育大学附属特別支援学校

講演 演題：わかる・できる楽しい授業作りのための子ども理解

演者 北海道教育大学教授青山眞二

北海道教育大学附属特別支援学校公開研究協議会の開催

平成27年2月7日（土） 8:50～16:30、（附属特別支援学校）

IV. 成果の公表

1. 学術論文等

三浦 哲・田村佳那・松田岳大・平山一馬・伊藤文雄・金澤恵美（2014）：特別支援学級在籍児童の授業場面における「人間関係の形成」についてー「他者とのかかわりの基礎」と「他者の意図や感情の理解」に関する分析方法の試作ー、北海道特別支援教育研究、8（1）、1-8、

小淵隆司(2015).へき地・小規模校特別支援学級に在籍する児童の保護者のライフストーリーのナラティブ・セラピーから相談援助を考える.へき地教育研究 第 69 号 北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター へき地教育研究支援部門

2. 著書

小野寺基史、青山真二、五十嵐靖夫（2014）、デキる「特別支援教育コーディネーター」になるための30レッスン&ワークショップ事例集、明治図書

小淵隆司(2014).第3章 相談援助の理論と実際 4「保育所・幼稚園における相談援助と巡回相談」.第6章 発達障害児・者の発達支援と相談援助 2「乳幼児期の支援」.別府悦子・喜多一憲編著.発達支援と相談援助ー子ども虐待・発達障害・ひきこもりー、三学出版.

青山真二(2014)、エッセンシャルズ KABC-IIによる心理アセスメントの要点、丸善出版

3. シンポジウム・学会発表によるプロジェクトの紹介

安井友康、青山真二、齊藤真善、千賀愛、三浦哲、池田千紗、小野寺基史、安達潤、大久保賢一、萩原拓、蔦森英史、小淵隆司、戸田竜也、二宮信一、五十嵐靖夫、北村博幸、細谷一博、小北麻記子、大山祐太、金澤恵美、松田岳大、田外真也、平田新次郎、厚谷摩紀、白府士孝、永長明之：地域特性に応じた特別な教育的ニーズに関する情報システムの構築、第9回北海道特別支援教育学会旭川大会、2014/10

Tasui,T. , Senga, A., Yamamoto, R. Okuda, T.:Developmental Changes of Motion in Trampoline Activity, The13th International Symposium of Asian Society for Adapted Physical Education and Exercise (ASAPE), Fujian, China, 2014/08

Yasui, T., Senga, A., Yamamoto, R.: Factors Affecting Inclusive Physical Activity in Recreation: A Case Study of Trampoline Activity, European Congress of Adapted Physical Activity, Madrid 2014, Madrid Spain, 2014/09

池田千紗、安井友康、佐藤飛友悟、千賀愛、山本理人：発達障害児におけるトランポリン上での跳躍動作と運動機能特性との関連、第16回合同大会（第35回医療体育研究会／第18回日本アダプテッド体育・スポーツ学会）、神戸女学院大学、2014/12

佐藤飛友悟、池田千紗、安井友康、千賀愛、山本理人：発達障害児におけるトランポリン活動前後でのバランス運動の変化、第16回合同大会（第35回医療体育研究会／第18回日本アダプテッド体育・スポーツ学会）、神戸女学院大学、2014/12

大山祐太：大学生の「障害」及び障がい者とのスポーツ活動に関する意識についての検討、第16回合同大会（第35回医療体育研究会／第18回日本アダプテッド体育・スポーツ学会）、神戸女学院大学、2014/12

小北麻紀子：先天性上肢欠損児童における運動用義手を通じた発達・成長の事例、第 14
回北海道障害者スポーツ・健康開発研究会、北海道教育大学岩見沢校、2014/12

北海道教育大学特別支援教育プロジェクト「ほくとくネット」

URL : <http://hokutoku.net>

平成26年度北海道教育大学特別支援教育プロジェクト報告

北海道教育大学特別支援教育プロジェクト

事務局

北海道教育大学札幌校特別支援教育（安井研究室）

〒002-8502 札幌市北区あいの里5条3丁目

電話/fax 011-778-0433

発行 平成 27年 3月 31日